

4 養蜂家の衛生意識向上を目指して！

～蜜蜂勉強会のアンケート調査から見た衛生管理状況～

中央家畜保健衛生所

○山本 栄子・深谷 祐加子・御村 宗人

I はじめに

管内における平成 30 年の蜜蜂飼育届出件数は 149 件で、うち 10 群未満が全体の 85%を占め、大多数が趣味として蜜蜂を飼育している。また、県内の蜜蜂飼育戸数について、平成 26 年から 28 年にかけて、10 群未満の戸数が増加し、それ以降も僅かに増加傾向である(図 1)。このことから、年々小規模の趣味養蜂家を中心とした戸数の増加が示唆される。日本の養蜂は従来養蜂家の間で徒弟制度的な技術継承が行われてきた分野であるため、新規に養蜂を始める人が適切な飼養管理や技術について十分に学べる機会が多くない。また、海外では養蜂に関する多くの書籍が発刊されているが、それに比べると日本では詳細な専門書がまだ少ないのが現状である。よって、新規養蜂家や趣味養蜂家を主な対象とした研修を実施する必要性が高まっている。

このような背景から、管内養蜂協会支部と連携し、管内養蜂家を対象とした蜜蜂勉強会を開催するとともに、養蜂家の飼養衛生管理状況を把握するため、アンケート調査を実施した。

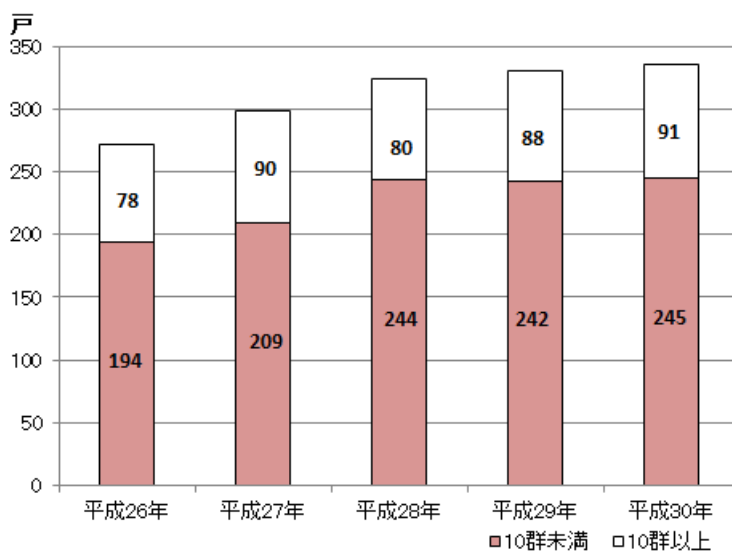


図 1 県内の蜜蜂飼育戸数 (平成 26 年～30 年)

II 勉強会の開催

1 開催日時

平成 30 年 7 月 29 日 (日) 13:30~16:30

2 場所

埼玉県県民活動総合センター 第 2 研修室

3 参加人数

約 70 人

4 講義内容

管内腐蛆病検査の実施状況、腐蛆病に関することを中心に、一般的な飼養衛生対策、蜜蜂に関する届出等及び糞害や分蜂等蜜蜂に係るトラブルについて講義を行った(図2)。



図2 勉強会の会場風景

III アンケート調査

1 方法

平成30年7月、勉強会参加者約70名に対してアンケート用紙を配布した。

2 結果

(1) 回答数

34名(約50%)

(2) 業態(回答者30名)

趣味:70%、副業:30%

※副業、趣味は各養蜂家の申告に基づく。

(3) 飼育歴(回答者27名)

1年未満:11%、1~4年:37%

5~9年:33%、10~19年:15%、20年以上:4%

(4) 飼育群数(回答者27名)

10群未満:63%、10~19群:26%、

20~29群:4%、30群以上:7%

(5) 巣箱の手入れ(回答者32名)

実施:72%、未実施:19%、再利用なし:9%

未実施と回答した者の多くは蜜蜂を飼い始めて半年や1年といった飼育歴の浅い養蜂家であった。

(6) 巣箱の消毒方法(回答者22名)

火炎消毒：52%、火炎消毒及び洗浄：30%、熱湯消毒：9%、洗浄のみ：9%

(7) 蜂具の消毒 (回答者 24 名)

実施：25%、未実施：75%

消毒を実施していると回答した養蜂家の内訳は、飼育歴 4 年以下で 25%、5～9 年で 44%、10 年以上で 75%であった。飼育歴が長い程、消毒実施率が高い傾向がみられた。

(8) 蜂場の石灰消毒 (回答者 28 名)

実施：18%、未実施：82%

実施者の消毒頻度は年 1 回程度に留まった。

(9) 巣脾の継続使用年数 (回答者 28 名)

1 年未満：7%、2～3 年：64%、4～5 年：29%

(10) 薬剤の使用状況 (回答者 30 名)

アピバール：44%、アピスタン：29%、アピテン：21%

養蜂家のバロア病対策への関心の高さが示唆された (図 3)。

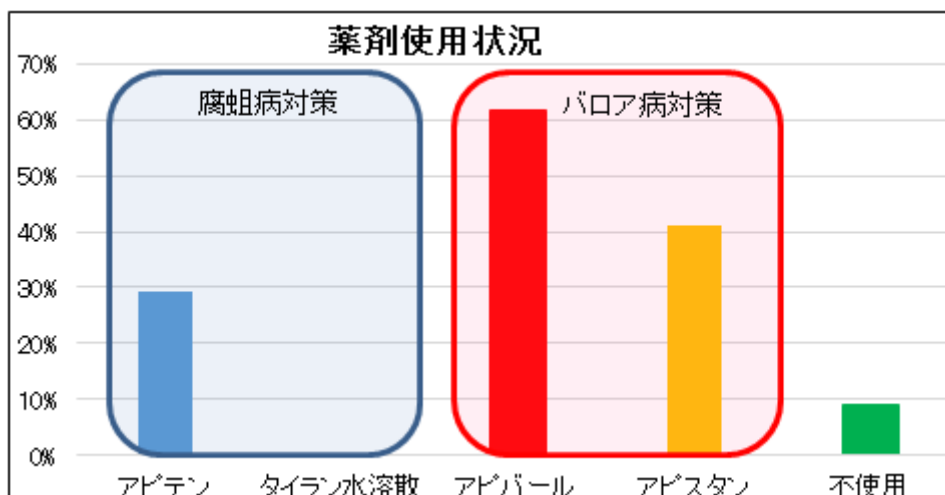


図 3 アンケート回答者の薬剤使用状況

IV 参加者から寄せられた意見

勉強会の全体の感想として、蜜蜂の疾病や消毒について学ぶ良い機会になったとの肯定的な意見が寄せられた。また、今後の研修内容として、巣箱見学等の実習や害虫対策に関する講義を期待する声があった。さらに、年 1 回程度の定期的な勉強会の開催や、対象者を本業と趣味で区分するといった要望があった。

V 今後の課題と対応

アンケート結果から、蜂具の消毒や蜂場の石灰消毒実施率が低いことや、巣脾を交換目安よりも長く継続使用することがある等、衛生管理が十分でないことが確認された。蜂具を介した疾病の感染

が主であると考えられることから、使用後は火炎消毒や各種消毒剤を用いて消毒を実施することが重要である¹⁾。また、過去に腐蛆病等の発症歴がある蜂場や、チョーク病が多発するような蜂場では、2週間間隔で消石灰による土壌消毒を行うことが推奨されている¹⁾。巣脾は長期間使用すると、病原体の温床となるものと考えられ、交換目安は3年程度とされている^{2) 3)}。

以上のような適切な衛生管理に関する知識を普及させるためにも、養蜂家に対する広報活動を積極的に行っていく必要がある。特に新規養蜂家に対して伝染病や薬品の適正使用、衛生管理対策について情報提供に努め、飼養管理技術の向上を図っていく。

今後とも勉強会を継続し、要望に沿った実地演習や害虫対策等を取り入れ、内容の充実を図る。

さらに、養蜂家の衛生管理状況を的確に把握できるよう、アンケート内容の改善や分析を行うとともに、養蜂協会等の関係団体との連携を一層強化し、積極的に疾病に関する正しい知識や適切な衛生管理の普及を図り、蜜蜂疾病の発生予防に取り組む。

VI 参考文献

- 1) 一般社団法人日本養蜂協会(2017), 養蜂における衛生管理消毒技術 :6-7,16,21
- 2) みつばち協議会(2011), 女王の作り方から伝染病対策を中心に 養蜂家向け! 養蜂マニュアル : 30-31
- 3) 田代卓也ら(2013), アンケート調査にみる管内みつばち事情, 埼玉県家畜保健衛生業績発表収録 (平成 25 年度),42-47